

梶井基次郎

檸檬



檸^れ

も

檬^ん

えたいの知れない不吉な塊かたまりが私の心を始終おさ圧えつけていた。焦躁しょうそうと云おうか、嫌悪けんおと云おうか——酒を飲んだあとに宿酔ふつかよいがあるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかつた。結果した肺尖はいせんカタルや神経衰弱がいけないのではない。また脊せを焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の

一節も辛抱がなくなつた。蓄音器を聴かせて貰いにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上がつてしまいたくなる。何かが私を居堪いたたまらずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

何故だかその頃私は見すぼらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れこわかかつた街だとか、その街にしても他所他所よそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚きたない洗濯物が干してあつたりがらくたが転ころがしてあつたりむさくるしい部屋が覗のぞいていたりする裏通りが好きであつた。雨や風が蝕めしむんでや

がて土に帰ってしまふ、と云つたような趣きのある街で、土塀どべいが崩れていたり家並が傾きかかつていたり——勢いのいいのは植物だけで、時とすると吃驚びっくりさせるような向日葵ひまわりがあつたりカンナが咲いていたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、不凶ふと、其処そこが京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのような市まちへ今自分が来ているのだ——という錯覚を起そうと努める。私は、出来ることなら京都から逃出して誰一人知らないような市へ行つてしまいたかつた。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団。

匂いのいい蚊帳かやと糊のりのよくきいた浴衣ゆかた。其処で一月程何も思わず横になりたい。希ねがわくは此処が何時いつの間にかその市になっているのだったら。——錯覚がようやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。なんのことはない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

私はまたあの花火という奴が好きになった。花火そのものは第二段として、あの安っぽい絵具で赤や紫や黄や青や、様ざまの縞模様を持った花火の束、中山寺の星下

り、花合戦、枯れすすき。それから鼠花火というのは一つずつ輪になっていて箱に詰めてある。そんなものが変に私の心を唆そそった。

それからまた、びいどろという色硝子いろガラスで鯛たいや花を打出してあるおはじきが好きになったし、南京玉なんきんだまが好きになった。またそれを嘗なめて見るのが私にとって何ともいえない享楽だったのだ。あのびいどろの味程幽かすかな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなって落魄おちぶれた私に蘇よみがえって来る故だろうか、全くあの

味には幽かな爽さわやかな何となく詩美と云ったような味覚が漂って来る。

察しはつくだろうが私にはまるで金がなかった。とは云えそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰める為には贅ぜいたく沢ということが必要であった。二銭や三銭のもの——と云って贅ぜいたく沢なもの。美しいもの——と云って無気力な私の触角に寧むしろ媚こびて来るもの。——
そう云ったものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだ蝕まれていなかった以前私の好きであった所は、たとえば丸善であった。赤や黄のオードロンや

オードキニン。洒落^{しやれ}た切子^{きりこ}細工や典雅なロココ趣味の浮模様を持った琥珀^{こはくいろ}色や翡翠^{ひすい}色の香水^{びん}壇。煙管^{きせる}、小刀、石鹼、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあった。そして結局一等いい鉛筆を一本買う位の贅沢をするのだった。然し此処ももうその頃の私にとって、は重くるしい場所にすぎなかった。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取の亡霊のように私には見えるのだった。

ある朝——その頃私は甲の友達から乙の友達へという風^{かぜ}に友達の下宿を転々として暮していたのだが——友達

が学校へ出てしまったあとの空虚な空気のなかにぽつねんと一人取残された。私はまた其処から彷徨い出なければならなかった。何か私を追いたてる。そして街から街へ、先に云ったような裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立留ったり、乾物屋の乾蝦ほしえびや棒鱈ぼうだらや湯葉ゆばを眺めたり、とうとう私は二条の方へ寺町を下り、其処の果物屋で足を留めた。此処でちよつとその果物屋を紹介したいのだが、その果物屋は私の知っていた範囲で最も好きな店であつた。其処は決して立派な店ではなかったのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物はかな

り勾配こうばいの急な台の上に並べてあって、その台というものも古びた黒い漆塗りの板だったように思える。何か華やかな美しい音楽の快速調アツレグロの流れが、見る人を石に化したというゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリウムに凝り固まったというふう

に果物は並んでいる。青物もやはり奥へゆけばゆく程堆高うずたかく積まれている。——実際あそこの人参葉の美しさなどは素晴しかった。それから水に漬けてある豆だとか慈姑くわいだとか。

また其処の家の美しいのは夜だった。寺町通は一体に

賑にぎやかな通りで——と云って感じは東京や大阪よりは
つと澄んでいるが——飾窓の光がおびただしく街路へ流
れ出ている。それがどうした訳かその店頭の周囲だけが
妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二条通に接している
街角になっているので、暗いのは当然であつたが、その
隣家が寺町通にある家にも拘かからず暗かつたのが瞭然はつきり
しない。然しその家が暗くなかつたら、あんなにも私を誘
惑するには至らなかつたと思う。もう一つはその家の打
ち出した廂ひさしなのだが、その廂が眼深に冠かつた帽子の廂
のように——これは形容というよりも、「おや、あそこ

の店は帽子の廂をやけに下げているぞ」と思わせる程なので、廂の上はこれも真暗なのだ。そう周囲が真暗なため、店頭に点けられた幾つもの電燈が驟雨しゅううのように浴びせかける絢爛けんらんは、周囲の何者にも奪われることなく、肆ほしいまにも美しい眺めが照し出されているのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒らせんぼうをきりきり眼の中へ刺し込んで来る往来に立って、また近所にある鎔屋かぎやの二階の硝子窓をすかして眺めたこの果物店の眺め程、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀まれだった。

その日私は何時いつになくその店で買物をした。というの

はその店には珍らしい檸檬が出ていたのだ。檸檬など極くありふれている。がその店というのも見すばらしくはないまでもただあたりまえの八百屋に過ぎなかつたので、それまであまり見かけたことはなかつた。一体私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの丈たけの詰まった紡錘形の恰好も。——結局私はそれを一つだけ買うことにした。それから私は何処どこへどう歩いたのだろう。私は長い間街を歩いていた。始終私の心を圧えつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか

弛ゆるんで来たときみえて、私は街の上で非常に幸福であつた。あんなに執拗しつこかつた憂鬱うゑふが、そんなものの一顆かで紛らされる——或いは不審なことが、逆説的な本当であつた。それにしても心という奴は何という不可思議な奴だらう。

その檸檬の冷たさはたとえようもなくよかつた。その頃私は肺尖を悪くしていつも身体に熱が出た。事実友達の誰彼に私の熱を見せびらかす為に手の握り合いなどをしてみるのだが、私の掌が誰のよりも熱かつた。その熱い故だつたのだらう、握っている掌から身内に浸み

透とおってゆくようなその冷たさは快いものだった。

私は何度も何度もその果実を鼻に持って行っては嗅かいでみた。その産地だというカリフォルニアが想像に上って来る。漢文で習った「売柑かん者之言」の中に書いてあった「鼻を撲うつ」という言葉が断きれぎれに浮かんで来る。そしてふかぶかと胸一杯に匂やかな空気を吸込めば、ついぞ胸一杯に呼吸したことのなかつた私の身体からだや顔には温い血のほとぼりが昇のぼって来て何だか身内に元気が目覚めて来たのだった。……

実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅きゆう覚や視覚が、ずっと

昔からこればかり探していたのだと云いたくなくなった程私にしっくりしたなんて私は不思議に思える——それがあの頃のことなんだから。

私はもう往來を軽やかな昂奮こうふんに弾はずんで、一種誇りかな氣持さえ感じながら、美的装束をして街を濶歩かっほした詩人のことなど思い浮べては歩いていた。汚れた手拭の上へ載せてみたりマントの上へあてがってみたりして色の反映を量ったり、またこんなことを思ったり、

——つまりはこの重さなんだな。——

その重さこそ常づね尋ねあぐんでいたもので、疑いも

なくこの重さは総すべての善いもの総すべての美しいものを重量に換算してきた重さであるとか、思いあがった諧かいぎやくしん謔心からそんな馬鹿げたことを考えて見たり——何がさて私は幸福だったのだ。

何処をどう歩いたのだろう、私が最後に立ったのは丸善の前だった。平常あんなに避けていた丸善がその時の私には易やすやすと入れられるように思えた。

「今日は一つ入って見てやろう」そして私はずかずか入って行った。

然しどうしたことだろう、私の心を充していた幸福な

感情は段々逃げて行つた。香水の壇にも煙管にも私の心はのしかかつてはゆかなかつた。憂鬱が立て罩めて来る、私は歩き廻つた疲労が出て来たのだと思つた。私は画本の棚の前へ行つて見た。画集の重たいのを取り出すのさえ常に増して力が要るな！と思つた。然し私は一冊ずつ抜き出しては見る、そして開けては見るのだが、克明にはぐつてゆく気持は更に湧いて来ない。然も呪われたことにはまた次の一冊を引き出して来る。それも同じことだ。それでいて一度バラバラとやって見なくては気が済まないのだ。それ以上は堪らなくなつて其処へ置いて

しまう。以前の位置へ戻すことさえ出来ない。私は幾度もそれを繰返した。とうとうおしまいには日頃から好きだったアングルのだいたいいろ橙色の重い本まで尚一層の堪え難さのために置いてしまった。——何という呪われたことだ。手の筋肉に疲労が残っている。私は憂鬱になってしまった。自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めていた。

以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだろう。一枚一枚に眼を晒さらし終って後、さてあまりに尋常な周囲を見廻すときのあの変にそぐわない気持を、私

は以前には好んで味わっていたものであった。……

「あ、そうだそうだ」その時私は袂たもとの中の檸檬を憶おもい出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試して見たら。「そうだ」

私にまた先程の軽やかな昂奮あつせんが帰って来た。私は手当り次第に積みあげ、また慌あわただしく潰つぶし、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加えたり、取去ったりした。奇怪な幻想的な城が、その度に赤くなったり青くなったりした。

やっとそれは出来上った。そして軽く跳おどりあがる心を

制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬を据えつけた。そしてそれは上出来だった。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンと冴えかえっていた。私は埃ほこりっぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

不意に第二のアイディアが起った。その奇妙なたくらみは寧むしろ私をぎよつとさせた。

——それをそのままにしておいて私は、何喰わぬ顔を

して外へ出る。――

私は変にくすぐったい気持がした。「出て行こうかなあ。そうだと出て行こう」そして私はすたすた出て行った。

変にくすぐったい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色こがねいろに輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだろう。

私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰りな丸善も粉葉こなばみじんだろう」

そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩いろどっている京極を下って行つた。

——一九二四年十月——

日本文学電子図書館

檸檬

著者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

昭和44年8月20日 4刷



日本文学電子図書館